説教要旨「良い羊飼いの見分け方」

ヨハネによる福音書　１０章　７～１８節

羊というのは弱い動物です。狼などに襲われたら、撃退する力も、逃げきるだけの早さも持ち合わせていません。それどころか家畜としての羊は、体毛が自然に抜け落ちることがないため、毛を刈ってもらわないと大変なことになるそうです。イエス様はわたしたちのことを、羊飼いに守られ、羊飼いに世話をしてもらわないと生きていけない羊に例えられました。悪意を持って襲いかかられれば、自力ではなすすべなく、奪われ、屠られ、滅ぼされるしかない弱い存在なのです。

ウクライナの情勢を見てもそうです。もちろんそこに至るまでの経緯があるのでしょうが、もはや問答無用と実力行使に出られたときに、どうすればよいのでしょうか。簡単には答えは出せそうにありません。日本は核武装するべきだという人たちの声も、大きくなっているようにも思います。しかし、核武装したからといってもう安心などということは絶対にありえません。敵意をもつ相手が存在する限り、どこまでいっても不安は尽きることがないのです。不安だから軍備を拡大しようという思いの行き着く所は、食うか食われるかの暴力が支配する世界です。そのような未来に希望が見いだせるでしょうか。

ロシアのウクライナ侵攻が始まって以降、ロシア正教の最高指導者であるキリル総主教の発言が、度々注目を集めてきましたが、彼もまた弱い羊にすぎません。命を賭して権力者に反対することができず、戦争を支持し、正当化する発言を繰り返すのです。

「よい羊飼いは羊のために命を捨てる」（11 節）のです。よい羊飼いとして、羊であるわたしたち一人一人のことを心にかけてくださり、自らの命を投げ出されることで、羊たちを襲う狼と戦ってくださったイエス様は、「互いに殺し合いなさい」とか「互いに憎み合いなさい」と命じてはいません。イエス様は弟子たちの足を自ら洗い、「互いに足を洗い合わなければならない」と命じ、新しい掟として「互いに愛し合いなさい」と命じられたのです。

わたしたちは、よい飼い主であるイエス様のこの声に聞きしたがって、歩んで参りたいと願います。

（２０２２・５・１　説教者：稲垣真実）